
それでも世界は止まらない

かーばんくる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでも世界は止まらない

【Nコード】

N3507BA

【作者名】

かーばんくる

【あらすじ】

世界は昔、遙か太古からその歩みを止めてきた。そしてそれは現代でもそうだ。誰にも気付かれることの無く世界は何度もその歩みを停止していた。

そしてそんな世界に巻き込まれてしまった少年が一人。
そしてそんな世界に慣れてしまった少年が一人。

止まってしまった世界をテーマに書いた小説です。

良かった読んでください。

序章（前書き）

はじめまして、カーばんくるです。

今回は序章で短いですがぜひ読んでください

序章

世界は何度も動きを止めてきた。何故だかは分からない。

それでもその動きを止めてきた。昔、それもはるか太古から。

誰もそれに気付くものはいない。

それでも極稀にその止まった世界に入り込んでしまう人がいる。

決まって五人、それ以上もそれ以下も無く、決まって五人。

止まってしまった世界では誰も死ぬことは無い、老いすらもない。
だが言い換えれば死ぬことが出来ない。

その五人は止まった世界から戻ってくる事も出来ず世間的には家出、
行方不明として処理される。

それでも五人は止まってしまった世界から抜け出す事を夢見ている。

第一章（前書き）

連続投稿です

第一章

「はい、ここは大切な所だからノートに写しておくように、後で提出してもらってからな」

いつもと変わらない風景、いつもと変わらないクラスメイト、いつもと変わらない退屈な授業。

眩暈がする。ああ、これは前兆だな。もうすぐこの『いつも』は崩れる。

ほら、五秒前、四秒前、三、二、一。

カウントが零になると同時に世界が色あせて、モノクロへとなっていく。

そして目に見える全てのものが動きをとめた。

板書をする教師、退屈そうに頬杖をつく生徒、真面目にノートをとる生徒、窓の外で風に揺られていた木の葉、飛び立とうと翼を広げた小鳥、その全てが模型のようにぴたりとその動作を停止した。

それと同時に授業を説明する教師の声、窓の外で選挙運動をする声、かすかな機械音でさえも、その全ての音が消え失せた。

「久しぶりだな、一年ぶり位か」

全てのものが動きをとめ、ありとあらゆる音が消え去ったこのモノクロの世界でただ一人動いている少年がいた。

その少年は特に驚く様子も無く、モノクロの世界を見回した。

この止まった世界で唯一動ける少年、志野廉しのれんはつまらなさそうに鞆から一冊の文庫本を取り出し、読み始めた。

廉にとってこの異常な光景は別に珍しいものではなかった。今まで何度も体験した事のある光景だった。

廉が初めてこれを体験したのは小学五年生の時だった。

その時は今と同じ授業中だった。唐突に眩暈を感じ、廉は思わず目を閉じてしまった。

数秒後眩暈は収まり、廉は目を開いた、そしてその目の前に広がるあまりにも異常な光景に廉は言葉を失った。

全てのものが色あせ、全ての音が消え去り、そして全てのものがその動作を停止していた。

「なんだよ……これ」

友人も、先生も全ての人が動かない

「なあ、おい、なんか言えよ、動けよ、動いてくれよ」

自分の前に座る友人の肩を掴み思いつきり前後に揺する。しかし友人は表情を変えることの無く虚空を見つめていた。

廉は徐々にパニックに陥っていく。

「頼むから、動いてくれえ！」

さらに強く揺すったが友人それでも全く表情を変えずに虚空を見つめ続けていた。

「先生、先生、答えてください、何なんですか、これは、答えて、答えてよお！」

板書をしている恰好から全く動かない教師も廉の言葉に答えることをせずに、その視線は黒板へと固定されていた。

「なんなんだよ！ほんとにどうなってんだよ！これは」

もしかしたら他のところは普通かもしれない。

そんな希望を持って廉は教室を飛び出した。

「助けて、みんなが変なんだ」

隣のクラスの教室の戸を開き叫びながら教室に飛び込んだ廉が見たものは、自分のクラスと同じ状態の教師、それに生徒達だった。

「なんで？ こども？」

何で、どうして、とふらふらと教室をよろめきながら出ながら廉は呟いた。

「一体どうしてこんなことに……」

廉は次の教室のドアを開けた。しかし、そこも自分の教室と全く同じ状態だった。

その次も、そのまた次の教室もすべて同じ状態だった。

「なんで、こんな事おかしい、どうしてこんなことになったんだよ」
混乱する思考の末に廉の目からは涙が溢れた。

「……そうだ、大人なら、先生なら何とかしてくれるかも知れない」
職員室、あそこなら先生がいる。頬を伝う涙を乱暴に拭い廉は廊下を駆け出した。

大人なら、大人ならきつとなんとかしてくれる。そう、大人ならまだ子供だった廉の瞳には、自分に出来ない事が出来る大人は不可能な事の無い完璧で絶対的な存在のように写っていた。

息を切らし、足に疲労がたまる。それでもこの状況をどうにか打開したくて、その一心で職員室へと急ぐ。

ようやくの思いで辿り着いた職員室の扉がまるで希望の象徴のように見えた廉は泣き笑いのような表情を浮かべた。

これで、これで元に戻る、と。

「先生、大変なんです。助けてください、みんなが、おかしいんです」

勢いよく職員室の扉を開き、中にいる教師に助けを求めた。

しかし、その言葉の途中で廉は異変に気付いた。

誰も、こつちを見ない？

「先生、聞いてますか？ 聞こえてますか？ 先生！」

教師達は誰一人として微動だにしない。

「先生、先生！ お願いです、助けてください！ お願いです、動いて、助けて！ 何か言つて！」

廉は涙を流しながら、叫ぶ様に懇願した。それでも教師は誰も廉に視線を向けずに、言葉一つ返さない。

？だ、先生まで、大人なのに、大人ならなんとかしてくれるって、そう思ったのに。

廉は足から力が抜け、そのまま床に座り込んでしまった。

一体、どうすれば、どうすれば元に戻るんだ……。誰か助けて。

涙で滲む視界に一つの機械が目に入った。電話だ。

そうだ、警察なら、警察なら何とかしてくれるかもしれない。

廉は力の抜けた足を叱咤し立ち上がり電話へと手を伸ばした。
1、1、0、とゆっくり番号を入れて行く。

しかし、職員室の電話からは全く何の反応も返ってこなかった。いくらボタンを押そうとも全く何の反応も返ってこない。

「何で？ どうして？ 電話が使えない？ どうして、警察に、大人に知らせなきゃダメなのに。どうしてだよ！」

学校の外なら、外なら普通かも知れない、いつも通りなのかも、外に居る大人の人に助けてもらおう。

廉は職員室から飛び出し、外を目指して駆け出した。

誰か、誰か、助けて！

廉のそんな願いも儂く、外も学校の中と変わらず目に見えるモノ全てが止まっていた。

赤信号でもないのに道路で停止する車、歩道で片足を上げたまま停止する人々。

商店街には楽しそうな表情で談笑をする主婦の姿があつたが、よく見たらその口は全く動いておらず、表情も全く動かない。

「誰か、誰か助けてください！ 誰か、いませんか、誰か動ける人はいないんですか！」

廉は力の限り叫び、止まった人々の間を走り抜けた。

誰か、誰か、動ける人は？

「交番、交番なら警察の人がいるはず」

廉は商店街を抜けた先にある交番を目指した。

しばらく走り続けようやく見えた交番へと廉は転がり込んだ。

「お巡りさん、助けて下さい、学校が、町がおかしいんです……す？」

廉はすぐそばにあつた交番の壁に背中を預けた。

廉の目の前にあるのは仕事なのか書類に何かを書き込んでいる警官の姿だった。しかし、開いたまま全く動かない口を見ればその警官も例外無く動けない事が分かる。

警察もダメ？ じゃあ、一体どうしたら、分からない、どうしたら、

もしかしたらもうずっとこのまま？

絶対に認めたくない可能性を思い浮かべ廉はさらなるパニックに陥った。

いやだ、そんな事絶対にいやだよ、誰か、誰か助けてよ。

廉はまるで夢遊病のようにふらふらと歩きだした。

第二章

家、か

目の前にある建物を見つめて廉は呟いた。

適当にあるいていたはずなのに自分でも気付かない内に足が家へと向かっていったのだろうか。

家、そうだ、家だ、母さんは？ 大丈夫なのか？ 大丈夫だよな、母さんなら、なんとかしてくれるはず。

廉は家の扉を

上げ、急いで家の中に入った。

「母さん、母さんどこ？」

母親からの返答はなかった。

母さんは大丈夫だ、絶対に大丈夫だ、いつもみたいに笑いかけてくれるにきまっている。

廉は自分にそう言い聞かせてリビングへ続く廊下を急いだ。

母の姿はすぐに見付かった。

母はリビングに設置されたソファでくつろぎながら誰かと電話をしていた。

その表情はとても楽しそうだったが、やはり開きかけのその口は先程から全く動いていない。

そんな母親の様子に気づかない、否、認めたくなかった廉はその事実から目をそらした。

「母さん。ねえ、聞いてよ、そんな電話後で良いでしょ。学校が、町が、みんながおかしいんだ。ねえ聞いている？ 誰も動かないんだよ。ねえ、母さんは違うよね？ 僕の話聞いてくれるよね？ 動いてくれるよね？ 声をかけてくれるよね？」

必死に受話器を片手に停止する母親に話しかける。それでも母親

からは何の反応も返ってこない。

「ねえ、聞いてるよね？ 僕の声、ちゃんと聞こえてるよね？ 母さんは大丈夫だよ？ ねえ、答えてよ。ふざけないで、そうだよって、いつもみたいに笑って答えてよ、ねえ、答えて、何か言ってお願いだから、答えてよお」

廉はその双眸から涙を溢れさせ、揺すりながら必死に母親に話し掛ける。母親はそれでも全く何の反応を示す事はなかった。

嫌だ、いやだ、イヤダ、母さんまでなんて厭だ。絶対に認めたくない。

ふとりビングの壁に掛けられた時計へと目をやった。

「時計まで止まってる」

何で、どうしてこんな事に。

何回目だろうか、一日に何度も感じた疑問を呟く。

廉はゆっくりと階段を上り自分の部屋へと入った。

どうしよう、こんな事普通じゃない。嫌だ。このまま戻らないかもしれない。

そう思うたびに廉の身体が小さく震える。

そんな事絶対嫌だ、絶対に、いつか元に戻る、そうなるにきまっている。

廉は祈るようにそう思った。

部屋の隅にうずくまり、膝を抱えて、涙を流しながら、元に戻る事をひたすら願っていた。

突如廉は強烈な吐き気に襲われた。

思わず目をつぶり自分の口に手を当てて喉元まで出かかったそれを必死に押し戻そうとした。

そして少し目を開いたとき目の前に広がる光景に廉は目を見開いた。

モノクロだった世界が徐々に色づいてきたのだ。

？、まさか、戻ってる？

モノ黒だった世界が完全に色づく、と世界に音が戻ってきた。

階下で楽しそうに電話をする母親の声、窓の外から聞こえる小鳥の囀り、風にそよぐ木の葉の音、かすかな電子音まで、全ての音が蘇った。

廉は急いで部屋の中にある時計を確認した。時計は何の問題も無く正常に動いていた。

戻った、もとに戻った！

廉は喜びのあまりその双眸から次々と涙をあふれさせた。

戻ったんだ、やっと、全部普通だ、普通に動いてる、音がちゃんと聞こえる！

こらえきれずに嗚咽を漏らす。

「はい、それでは、また今度……はい、はい、ではお元気で」

階下で電話が切られた。階段を足音が上ってくる。トントンと一段一段を上る足音がする。

そのなんでもない事がまた嬉しくて、廉はさらに涙をあふれさせた。

足音は廉の部屋の前でとまった。

ドアをノックする音が聞こえる。

「廉？ 帰ってるの？ どうしたの、泣いているの？」

どうやら廉が漏らす嗚咽に気が付いたようだ。

「どうしたの、入るわよ」

部屋のドアが開けられた。母親の姿が見える。

その顔には戸惑い、そして我が子を心配する表情が浮かべられていた。

「どうしたの？ 学校で何かあったの？」

その何気ない動作が、言葉がとても嬉しくて、廉は母親に抱きついて、大声を上げて泣いてしまった。

母親は戸惑い一つも優しくその頭をなで続けていた。

第三章（前書き）

第三章です！

第三章

初めて時間停止を経験してから現在まで、長くて約一年、短くても一カ月、という間隔で時間は停止を繰り返していた。止まる期間はそう長く無く、体感時間で二・三時間といったところだった。

小学六年生の夏休みを境に廉は次第にこの異常な世界に慣れてきた。最初こそ戸惑ったものの四回程経験すればずいぶん慣れて、六回も体験すれば止まっている間に悪戯を仕掛けたりするようになった。

しかし中学校に入学する頃には悪戯にも飽き、暇を持て余すようになった。

止まった世界には時間としては二・三時間程位しかないのだが、話し相手もなくそんな時間を一人でいる事は、廉にとってはかなりの苦痛だった。

以前はこの異常な世界に驚きと好奇心を溢れさせていたその瞳は無気力なものに変わり、時間の止まっている間はただ暇をつぶす方法を探し、無意味に過ごしていた。

そして今、廉は高校生になって初めての時間停止を体験していた。しかしそんな事を気にする様子もなく廉は黙々とページを読み進めて行く。

本のページも残り少なく、書かれた物語もクライマックスを迎えた頃、

ガッシャーン

この世界にある筈の無い『音』が鳴り響いた。

「音っ！」

驚きのあまり読んでいた本を取り落とし、椅子から立ち上がった。何故？この世界では今までと違って一切無かった。あるのはただ気が狂いそうな程の静寂だけだった。

それが何故？

廉は教室を飛び出し、音の発生源へと急いだ。

音の元へと廊下を全速力で駆ける。

早く、もっと早く。

廉は今までずっと変化の無かった世界の突然の異変に対しての期待、不安、少しの恐怖、それらの感情がぐちゃぐちゃに入り混ざって混乱をしていた。

廊下を走っているとそれ（・・・）は見えてきた。廊下に散らばるそれら（・・・）は窓ガラスの破片だった。

廉は廊下に散らばる破片がもともとおさまっていたと思われる窓枠へと視線を向けた。

「何で割れてるんだ」

そのいままではありえなかったものを目の前に考え込む廉の視界の端に何か動くモノが写った。

なんだ？

驚き顔を上げた廉の目に入ったものは廊下を走っていく一人の少女の後ろ姿だった。

「待て！」

少女は廉の声を聞こえたのだろうか、一度足を緩めかけたがすぐにまた走り角を曲がり姿を消した。

少女の姿が見えなくなると同時に廉は強烈な吐き気をもよおした。

まずい、前兆だ。

廉は色づき始めた世界に焦り、ついさっき駆け抜けてきた廊下を吐き気を堪えながら急いで引き返した。

廉が教室の自分の席に着くのと世界が完全に動き始めるのは同時だった。

「それじゃあ、この問題を誰に説いてもらおうか……そうだな」

教師は何事も無かったかのように授業を再開し、クラスメイトも

普通に授業を受けている。

風に揺られていた木の葉は枝を離れ空へと舞い上がり、羽を広げたまま停止していた小鳥は大空へと羽ばたいた。

何なんだあいつは、何故逃げた？ あのガラスはあいつがやったのか？

いや、そんな事よりも、あいつは動いていた。他のモノがすべて停止した世界で。おれだけじゃなかったのか。まさか他にもいるのか？

廉の頭の中は先程見た正体不明の少女の事とめどなく溢れてくる疑問でいっぱいだった。

「おい志野、聞こえているのか？」

教師の声に思考の波が一時止まる。どうやら何度も呼ばれていたようだ。

「……何でしょうか、先生」

廉は鬱陶しそうに応答を返す。邪魔しないでほしかった。今はあの思考の渦にのまれて答えが出るかも分からない少女の正体について考えていたかった。

「何でしょうか、じゃない、さつきから何度も読んでいる、返事ぐらいせんか！」

うるさい、今は話しかけるな、考えていたいんだ。邪魔するな。

「おまえこの問題解いてみる」

教師は廉の態度が気に入らなかったようで、顔をしかめながら黒板に書かれた一つの問いを指した。

その問題は普段の廉なら何の苦も無く答えられる問題だった。しかし今の廉は問題に集中しようとも頭の中では次々と少女に対する疑問が浮かんでは消え、浮かんでは消えと止まる事を知らないように溢れ出てくる。

廉は頭の中の疑問を全てどこかへ追いやろうと首を振るが疑問は消えるどころかさらに増えて行く。

気分は最悪だった。頭の中の疑問の数に眩暈を感じ、問題に集中

が出来ない。

廉は自分の顔色がどんどん悪くなっていくのが分かった。

「志野、おまえ大丈夫か？ 顔色悪いぞ」

教師もようやく廉の様子に気付いたようで身を案じる声を掛けてきた。

「すみません、気分悪いんで保健室に行ってきます」

なんとかこれだけを言い廉は教室を後にした。

自分と同じようにあの世界で動ける存在。廉はまさかそんなものがいるとは考えもしなかった。

廉は保健室で借りたベッドに横になり中断してしまった思考を再開した。

嬉しいのだろうか、自分と同じ存在がいて。

廉は自らに問いを課す。

嬉しい、廉の中にある感情はそんなものとはほど遠かった。

違う、俺は怖いんだ。今までずっと一人だと思っていた世界は、そうじゃなく他の人間もいた。もしかしたらもっと居るのかもしれない。

わけの分からない世界に居た、得体のしれない少女。あの世界自体良く分からないんだ。そこに居る存在が自分と同じ存在なのか、もし同じ存在だとすると正気なのか。

あの世界なら気がくるってもおかしくは無い。廉はそう思っていた。

「そうか、俺は嬉しいんじゃない。……怖いんだ」

自分と同じ存在、ずっと自分一人だけだと思っていた世界は実はそうじゃなくて自分以外に全く分からない存在がもう一人いた。

その存在は友好的なのだろうか、それとも、敵意があるのか。

そんなことも全く分からない存在が自分は、怖いんだ。

廉はそんな考えを頭から追い出すように眠りに落ちた。

第三章（後書き）

いかがでしたか？

感想、レビューをいただけると作者はとってもうれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3507ba/>

それでも世界は止まらない

2012年1月11日23時52分発行